

使用言語が話し手に及ぼす影響

—日本語以外を母語とする複数言語話者への聞き取り調査から—

東 本 裕 子

使用言語が話し手に及ぼす影響

—日本語以外を母語とする複数言語話者への聞き取り調査から—

東 本 裕 子

目 次

1. はじめに
2. 先行研究のレビュー
3. 調査方法
4. 調査結果
5. まとめ

1. はじめに

複数言語を話す話し手が、使う言語によって自身の態度や感情の表し方を変えようという現象が近年観察される。筆者の周りにも実際に、日本語と英語を話す時で大きく印象が異なる話し手が少なからず存在する。その背景要因を探るために日本語を母語とする日英二言語話者を対象に調査を行った結果、多くの話し手が言語そのもののみならず、各言語の背景文化や社会の持つイメージから影響を受けていることが発見された（東本, 2015a）。

言語や背景文化から受ける影響の大きさは、話し手の対象言語能力と関連はしているものの、必ずしも正比例の関係にある訳ではないこともわかった（東本, 2015b）。英語力が低い段階の学習者であっても、英語の言語的特性や背景文化から力を借りることで「英語での自分」という新しい自己イメージを得た結果、流暢では無いものの、日本語を話す時とは異なる積極的な明るい様子で生き生きと話す姿が多く観察された。また、英語を使うことにより、日本の文化的且つ社会的プレッシャーから精神的に解放され、自身の気持ちを自由に表現し易いと感じているという被験者も多く観察された（東本, 2015b）。

本論では、言語や背景文化が話し手に及ぼす影響を別の角度から見るために、日本語以外を母語とし、日本語を第二言語、もしくは第三言語として習得した複数言語話者を対象とし、インタビュー調査を行う。本研究から得られた結果を英語教育の現場に還元し、学習者にとってより魅力的且つ自己実現に繋がる英語学習の指導法を探ることを今後の課題としたい。

2. 先行研究のレビュー

2.1 話し手と言語と背景文化

まず文化の定義を示したい。文化をどのように捉えるかについては、これまで多くの議論がなされて来た。牧野（2003）は、文化とは「ある社会の成員によって習得され、共有され、伝達されている（言語を含む）さまざまなコミュニケーションの様式である。」^[1]とし、南（2009）は、文化とは「ほかの集団の構成員とは異なるある社会的な集団の構成員だけが持っている行動のレパートリー」^[2]であり、人は誰でも所属する集団の「文化的背景を通して物ごとを見るようになり、他者の行動、言動を解釈、判断するようになる」^[3]と

述べている。

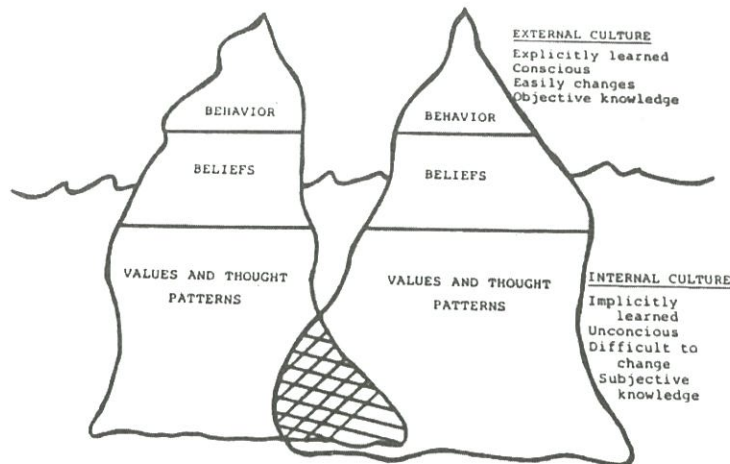
Kluckhohn & Kelly（1945）は文化を“all the historically created designs for living, explicit and implicit, rational, irrational, and nonrational, which exist at any given time as potential guides for the behavior of men”^[4]（歴史の中で創られてきた人々の生活の様式のすべて。明文化されているもの、そうでないもの、また道理に適ったもの、そうでないもの、全く道理に合わないもの等すべて含めて、どんな時においても人々の行動の指標となり得るもの。著者訳）とし、Downs（1971）は次のように述べている。“We can think of culture as a mental map which guides us in our relations to our surroundings and to other people.”^[5]（文化とは自分を取り巻く周辺状況や他者との関係において我々を導く精神的な道標となる地図である。著者訳）

これらの説に基づき本論では、文化とは社会の構成員が生まれもって持っているものではなく、集団に所属することによって後天的に身に付け、物事の解釈や判断の基準とする団体共有的なものであると定義する。またAdler（1998）の“no human being can hold himself apart from some form of cultural influence. No one is culture free.”^[6]（何人も何かしらの文化的影響を受けており、完全に文化から自身を引き離すことは出来ない。全くもって無文化であるという人は存在しない。著者訳）という説を採用し、いずれの文化にも所属せずに無文化の状態にいる人はいないとの考えに沿って論を進めたい。

Weaver（1986）は下記の氷山の図を用いて、言語活動と背景文化の密接な関係を示した。人の言動や行動等、外から見ることの出来る部分は、図の中の氷山の水面上に見える一角部分に相当し、その土台となる水面に潜っている大きな部分が、人の価値観や思考方法等、背景文化的なものに相当すると述べている。

Weaver同様に言語と文化は切り離すことが出来ないという立場をとる研究者は多く、石井（1996）は「諸言語には固有の特徴があり、各生活文化にも著しい多様性が認められ、両者の間に密接な相関関係があることも事実である。日本語の複雑な敬語体系が日本の対人関係や価値観などの文化との関係の中で機能しているのは一例である。」^[7]と述べている。

また井出（2005）は「言語はそれを使う人々のものの見方や行動としての文化を反映している」^[8]とし、ウォードハフ（1994）も言語と文化の密接な相関関係を唱える立場から、「異なった話し手は、彼らの話す



The "Iceberg Analogy" of Culture (Weaver, 1986, p.135)

言葉が構造的に違っている限り世界観も異なる。言語間の微妙な構造的差異をすべて知る最も洗練された言語学者であっても、世界をそのまま見ることは出来ず、さまざまな言語のスクリーンを通じて表現される物を見ているのである⁹⁾と述べている。

言語と文化の密接な関係は、鍋倉 (1997) が「それぞれの文化が人々が共有する意味の範囲を規定しているため、文化背景の違いが意味の誤差を生じさせることがある¹⁰⁾」と述べているように、時として異言語間の翻訳や通訳において訳出の誤差や誤解を生じさせることもある。翻訳者の滝川 (1995) は、「翻訳においては誤訳の危険性が宿命的に生じると言われているが、多くの誤訳は異文化間に存在する概念の違いに起因している¹¹⁾」と述べている。また通訳者の灘光 (2002) も、通訳という仕事を単なる「言語の仲介人」ではなく、「異文化コミュニケーター」として位置付けている¹²⁾。

山岸 (1995) も「difference/違い、相違」という、通常同じ単語として日英間で置き換えられることの多い単語を例に挙げ、例えば日本語においては「違い」や「相違」は時としてマイナスイメージをもたらすこともあることに対し、英語のdifferenceは無色でありマイナスイメージは無い等、実際の言語運用場面において言語間で文化的な意味のズレが生じる可能性について述べている¹³⁾。また土居 (1971) も、「甘え」という言葉を用い、言語と文化の密接な関係と特定の概念の有無、そしてそれらが話し手に与える影響について述べた。

さらにErvin-Tripp (1964, 1967) の研究においても、

日本語と英語の二言語話者、もしくは英語とフランス語の二言語話者に対する調査の結果、話し手がそれぞれの言語を話す際に、各言語の背景文化の特徴と結びつく「平和」(日本語)、「成功」(英語)、「自由」(フランス語)という概念に影響を受けながら発言をしているという結論が導かれた。

これらの多くの先行研究より、言語と背景文化が密接な関係にあり、共に話し手に影響を与えていることが窺い知れる。次項では、話し手が使用言語から実際に影響を受けている様子を具体的に取り纏めた先行研究を紹介する。

2.2 外国語から得る新しい自己像

Norton (1997) は、カナダへ移住した女性たちが新たな言語を習得することにより新しい自己を確立して行く様子を観察した結果、使用言語が話し手のアイデンティティに大きな影響を及ぼすことを確信した。そして言語学習の目標として本質的な言語能力の獲得のみではなく、自身が持ちたいと願う理想的なアイデンティティの獲得を掲げた。細川 (2011) も、アイデンティティを「個人がさまざまに有している複数の自己の姿であり、それらの自己が必要とする『居場所』感覚のこと¹⁴⁾」と定義をした上で、言語を習得することにより自己の世界が再構築されるとの考えのもと、アイデンティティという新しい観点から総合的に捉え直した言語教育を実践している。

マッカーティ (1999) は、日本語を母語とする日英二言語話者と英語を母語とする日英二言語話者の双方

を対象に調査を行った。興味深い結果として、英語母語話者の中に、日本語の習得により他人に対し以前に比べて丁寧になり、意見を述べるにあたり用心してかかるようになる等、対人関係における反応や行動が日本人に近くなったと答えた回答者がかなり多く目立ったことが挙げられる。逆に日本語母語話者の回答には、英語の習得により英語の伝達様式を取り入れることで、英語を話す時のみならず、日本語を話す時にも以前より率直に発言するようになったという声が目立った。

東本（2015a）が日本語を母語とする日英二言語話者を対象に行った調査においても、英語を話す時には、日本語を話す時に自ずと縛られてしまう大和撫子的な女性像から解放され、より本当の自己を表現出来る快適さを覚えるという意見が多く女性回答者に見られた。これらの回答者のように、英語を通してより自分らしい自己表現、または自己実現を試みる日本人についてKelsky（2001）とBailey（2006）は“new self”-「新しい自分」を探すと位置付け、英語習得を通して新しい自己像の構築を試みる日本人女性に関して論じた。

英語の手段を用いてより真実の自分を表現しようと試みる日本人に関する研究は、これまでHensor（2000）、Burton（2003, 2006, 2011）、Pavlenko（2006）等により進められて来たが、これを英語教育の指導に活用する研究はほとんど見当たらない。今回の調査から得られる結果とこれまでの研究結果をもとに、英語を使用することによる新しい自己像の獲得というアプローチを学習者の動機付けに活用し、単なる言語能力の習得のみならず、プラス a の付加価値を感じられるような実りの多い英語教育を目指したい。

3. 調査方法

今回の調査は、日本語と英語が共に通訳レベルという極めて高い言語能力を持つ複数言語話者を対象とし、日本在住で日本語と英語を仕事と生活で日常的に使用している、筆者の元同僚や友人、またその家族や友人である外国出身のビジネスパーソン16名に協力を依頼した。対象者は全員日本語以外の言語を母語とし、日本語は第二言語、または第三言語として仕事や日常生活において使用している。

調査協力者の年齢層は、20代が1名、30代が5名、40代が7名、50代が2名、60代が1名で、性別は男性が10名、女性が6名である。国籍の内訳はアメリカ人

11名、フランス人、インド人、コロンビア人、イスラエル人、オーストラリア人が各1名ずつである。10名は日本語と英語のバイリンガルであるが、4名は3か国語、1名は4か国語を流暢に話し、またイスラエル出身の被験者は5か国語を流暢に話す。調査は日本語と英語による個別インタビュー形式で、2015年7月16日～2015年10月22日に筆者の勤務校の教室や調査協力者の勤務先、またカフェ等で行われた。

16名の被験者にはそれぞれ90分から120分ほどの個別の半構造化インタビューを依頼した。中心質問項目として、日本語を使う時と英語を使う時の自身の気持ちの変化や、変化がある場合におけるその考え得る原因等、事前に5つの質問を準備したが、回答者が自由な雰囲気と言語や自身の心持ちに対する考えを話せるように、可能な限り対話の形式でインタビューを進めた。インタビューの使用言語は日本語と英語の双方とし、調査中に使用言語を変えた場合の回答者の実際の反応や様子の変化に対する観察も行った。インタビューの内容は、回答者の了承を得た上でボイスレコーダーへ録音し、文字化した。

3.1 調査対象者

16名の調査対象者の一覧は下記の表1の通りである。なお、調査対象者には便宜上C1（Case1）からC16（Case16）まで記号を振った。話す言葉は各調査対象者の仕事や日常生活において使用頻度の高い順で記載した。下線がひいてある言語は各調査対象者の母語である。各対象者の個別の詳細な情報は巻末の添付資料1を参照されたい。

3.2 インタビュー調査項目

設問は、中心的な項目として言語と気持ちに関する5つの設問を設定し順に尋ねたが、可能な限り自由な雰囲気の対話の形式でインタビューを進めた。各設問に関しては、巻末の添付資料2を参照されたい。

4. 調査結果

4.1 インタビュー調査結果

本項では、各設問に対する回答の構造化部分の数値結果を示し、各回答者からのコメントは設問ごとに巻末添付資料としてまとめた。

表1 インタビュー調査対象者一覧

	年齢・性別	出身・日本居住歴	話す言葉	職業
C1	50代・女性	インド・30年	日本語・英語・ベンガル語	大学教員
C2	40代・男性	アメリカ・20年	日本語・英語	大学教員
C3	40代・男性	アメリカ・18年	日本語・英語	俳優
C4	50代・男性	アメリカ・18年	日本語・英語	日本企業・広報
C5	30代・男性	アメリカ・10年	英語・日本語	専門学校教員
C6	40代・男性	イスラエル・10年	日本語・英語・ヘブライ語・西語・仏語	日本企業・翻訳
C7	30代・男性	フランス・8年	日本語・英語・仏語	日本企業・製品開発
C8	30代・女性	コロンビア・14年	日本語・英語・西語	大学教員
C9	40代・男性	アメリカ・20年	日本語・中国語・英語	日本企業・製品開発
C10	60代・男性	アメリカ・31年	英語・日本語	日本政府関連機構
C11	30代・女性	アメリカ・8年	日本語・英語	日本企業・広報
C12	40代・男性	アメリカ・20年	日本語・英語	日本企業・翻訳
C13	40代・男性	アメリカ・18年	日本語・英語	日本企業・企画
C14	40代・女性	アメリカ・24年	日本語・英語	企業異文化講師
C15	30代・女性	アメリカ・11年	英語・日本語	企業異文化講師
C16	20代・女性	オーストラリア・4年	英語・日本語・北京語・広東語	英語・異文化講座教材作成

【Q1：使用する言語があなたの考え方や話し方に影響を与えると思いますか？日本語を話す時と英語を話す時で気持ちの変化がありますか？】

表2 使用言語による話し手への影響と気持ちの変化の有無

ある	16名	100%
ない	0名	0%
合計	16名	100%

Q1に対する回答は「ある」16名、「ない」0名となった。各回答者のコメントは巻末の添付資料3を参照されたい。なお、英語でのコメントは、原文の意図を損なわないよう留意した上で筆者が日本語へ訳した。

【Q2：話す言語によってあなたの印象や行動や声の高さが変わると他の人から言われたことがありますか？】

表3 使用言語による自身の印象の変化に対する指摘の有無

ある	12名	75%
ない	4名	25%
合計	16名	100%

Q2に対する回答は「ある」12名、「ない」4名となった。「ある」と答えた回答者のコメントは巻末の添付資料4を参照されたい。

【Q3：話す言語によって印象や行動や声の高さが変わる人を知っていますか？】

表4 使用言語による印象の変化のある知人の有無

ある	16名	100%
ない	0名	0%
合計	16名	100%

Q3に対する回答は「ある」16名、「ない」0名となった。各回答者のコメントは巻末の添付資料5を参照されたい。

【Q4：英語と日本語のそれぞれ便利もしくは不便だと感じる点はどのようなことですか？】（複数回答可）

それぞれの回答を内容ごとに分類し、回答数の多い順に表にまとめた。回答者のコメントは巻末の添付資料6を参照されたい。

表5 日本語の便利な点

敬語で敬意を表し易い	5名
曖昧な表現が多く、間接的にぼやかして話し易い	3名
定型挨拶や決まり文句が多い	1名
漢字から視覚で意味を掴み易い	1名
日本文化や日本での生活をビタリと言い表す単語や表現が豊富	1名

表6 日本語の不便な点

敬語の使い方が難しい、敬語のため親しくなり辛い	9名
女性語の使い方が難しい	2名
昇給交渉等、お金に関する話が辛い	2名
率直に話し辛い、直接的な表現を使い辛い	1名
論争的なことを話し辛い、議論をし辛い	1名
単数、複数同形の表現が、数がわかり辛く不便	1名
感情を表す言葉や表現が少なく、気持ちを伝え辛い	1名
定型挨拶や決まり文句が多く、個性を出し辛い	1名
漢字が難しい、覚え辛く忘れ易い	1名

表7 英語の便利な点

感情を表す言葉や表現が豊富で、気持ちを伝え易い	4名
率直に話し易く、話を前に進め易い	3名
友好的な表現が多く、人との距離を縮め易い	1名
アルファベットが26のみでシンプル	1名
世界的に広がりを持つ言葉で、話す人が多い	1名
決まり文句が少ないため、心と頭を使って自分の言葉でお互いしっかりコミュニケーションを取り易い	1名

表8 英語の不便な点

曖昧に話せず、全て言語化して直接的に話す点	4名
敬語のような、敬意を表すのに便利な言葉が少ない	1名
言葉の成り立ちの背景が様々でスペルが難しい	1名
定型表現や決まり文句が少ないため、自分の言葉でしっかりと率直に話すことを期待される点が面倒	1名

【Q5：二言語以上話すことが出来ることによるメリットやデメリットはどのようなことですか？】

（複数回答可）

Q5に対し、16名全員が二か国語以上を話せるメリットを「ある」と答えたが、デメリットに関しては、8名は「なし」と回答した。それぞれ内容ごとに分類し、回答数の多い順に表にまとめた。各回答者のコメントは巻末の添付資料7を参照されたい。

表9 二か国語以上話すメリット

世界、視野、ネットワークが広がる	14名
対応可能業務の幅が広がり、仕事に就き易くなる	4名
コミュニケーション能力が向上する	3名
他文化に敏感になり、配慮をするようになる	3名
状況にピッタリの表現をそれぞれの言葉から使える	3名
外国語を学ぶことにより母国語をより深く学べる	2名
複数言語を話すことにより痴呆を防ぐ	2名
危険な状況で周囲に知られずに仲間の暗号的に使用	1名

表10 二か国語以上話すデメリット

なし	8名
母語が弱くなる（特に外国で長期生活の場合）	3名
長期日本滞在後は、言葉のみならず、日本文化のコミュニケーションスタイルが深く身に付き、アメリカへ戻ってもアメリカ仕様に戻るのに時間がかかる	2名
二言語混ぜずに話し辛い、常にコードスイッチング	2名
一つの言語と文化への所属感が薄まり、自己アイデンティティに不安を覚える	1名
複数言語使用は脳にダメージを与えるという記事を読み、特に自分の子育て面で心配	1名
英語しか話せなかった時は、日本では厚遇されたのに、両言語出来るようになるとお客さん扱いされず、待遇が悪い（日本のウチとソトの文化か？）	1名

4.2 インタビュー調査結果のまとめと考察

今回の調査で得られた回答からわかったことは以下の通りである。構造化部分のインタビューの数値結果を中心に論じたい。

- ① 使用言語によって自身の思考や話し方が変化する人が多い。（100%）
- ② 使用言語によって印象が変わると周囲から言われた人が多い。（75%）
- ③ 使用言語によって印象が変わる人が知人にいる人が多い。（100%）
- ④ 上記①②③において、言語と背景文化の密接な繋がりが見られ、日本語を話す時には日本文化的な言動や感情の表し方、英語を話す時には英

語圏文化的な言動や感情の表し方をする人が多い。

- ⑤ ある回答者にとって一つの言語の便利な点として感じられている言語特性が、別の回答者にとって不便な点として挙げられている場合も多く、一つの特性が長短両面の要素を持っていると同時に、それぞれ背景文化との深い関係が見られる。
- ⑥ 全員の回答者が複数言語習得のメリットがあるとし、言語の習得と共に背景文化要素も身に付くことにより、複眼的な視野と幅広いネットワークを得たことを挙げた人が多い。(87.5%)
- ⑦ 半数の回答者が複数言語習得のデメリットはないと答え、残りの回答者は、新しい言語の習得により母語が弱くなること等をデメリットとして挙げている。新しい言語の背景文化の要素が深く身に沁み込み、母国へ戻って母語で話している時でも新しい言語仕様のコミュニケーションスタイルが抜けにくい等、言語を通じた文化の浸透度に関する回答も複数挙げられている。また、言語表現活動と自己アイデンティティの繋がりについて言及した回答者もいる。
- ⑧ インタビュー全体を通して、日本文化の女性に対する期待像について触れた回答者が、特に女性に目立った。伝統的な大和撫子的女性像に賛同する回答者も、反発を覚えている回答者もいたが、いずれの場合にも日本語を使用する際にそのような女性への期待値が意識されるという部分は共通している。

以上のことから、使用言語が話し手に大きな影響を与えていることがわかる。同時に、その言語の背景文化も話し手に深く影響を与えていることもわかった。また話し手の母語が何語であるかということよりも、その対象使用言語がどのような文化的特性を持っており、その言語が使用される社会において何がよしとされているかが、話し手が言語を使用する際に目安とする物差しとなっていることもわかった。

このことは外国語を学ぶにあたり、単に言語体系そのものを習得するのみではなく、その言語が使われている文化に関する知識を身に付け、実際にその言語を用いていかに社会に参加をするかという感覚を育てることが大切であるということを示唆しているのではないだろうか。

5. まとめ

本論では、使用言語が話し手の思考や言動に影響を与えているかを調べるために、日本語以外を母語とし、日本語を含む複数言語を通訳レベルで話す話者を対象にインタビュー調査を行った。その結果、話し手が実際に使用言語やその背景文化から大きな影響を受けていると言う結果が得られた。今回の調査は16名と少ない被験者へインタビューを行った半質的研究であるため、一般的な結論を述べることは出来ない。しかし得られた調査結果は、日本語を母語とし、日本語と英語を含む複数言語を話す話者241名を対象に東本(2015a, 2015b)が行った調査の結果と一致し、非常に大きな意味がある。

今回の調査から明らかになったことは、話し手はその人の母語にかかわらず、その時々使用する言語の文化的特性から大きな影響を受けていることである。例えば日本語を話す時にはほとんどの人が日本的な仕草や押し出しを用い、日本文化や社会に合う内容へ自身の発言を調整している。一方、英語を話す時には英語圏文化的なジェスチャーや表現を用い、英語圏文化でよしとされる内容や話の進め方で発言を行う姿が見られる。

筆者はこれまで英語教育の軸として、単なる言語能力の習得のみではなく、英語を通して学習者自身が理想とする自己像を得、自己効力感を上げることも目標の一つとして掲げて来た。今回の結果は、この「英語での自分」という切り口からの英語学習へのアプローチが効果的であることの裏付けとなるであろう。学習者の中でも特に英語に苦手意識を持っている学習者や英語学習の意味自体を見付けることが出来ない学習者、また自己肯定感が低い学習者に対して、従来の言語力習得を前面に押し出した英語教育よりも、「新しい自分」という新たな自己像を作る英語教育のアプローチは有効である、と今まで接した学習者の様子からも感じている。また今回改めて、言語学習を背景文化の一部として、実際の言葉の使用環境やその言語を母語とする人々とのコミュニケーションスタイル等も含めた包括的な言語教育として進める重要性も再認識した。

国が英語教育へ注ぐ力と期待は高まる一方のように見えるが、実際には日常的に英語を使うことがほとんどない環境で、謳われている英語の将来的必要性を自身と結びつけることに難しさを感じる学習者も少な

らず存在する。そのような学習者にとって、新しい自己像を手に入れるというアプローチは、英語学習を自身にとってより実益的に意味付ける副産物として魅力的にも映るようである。

今後も教室での学習者の観察を続けると共に、より多くの被験者とより多くの項目による量的調査も行い、本研究を更に深めたい。そして実際の英語教育現場において活用出来るよう発展させることを今後の課題としたい。

付記

本稿は、9th International Conference on Teaching, Education and Learning (2015年12月19日～20日)において発表をしたものに加筆・修正を加えたものである。

謝辞

本研究の一部は、横浜商科大学学術研究会助成金の援助による。ここに感謝の意を示したい。

注

- 1 牧野成一「文化能力基準作成は可能か」『日本語教育』第118号 p.1
- 2 南雅彦『言語と文化 言語学から読み解くことばのバリエーション』p.16
- 3 南雅彦『言語と文化 言語学から読み解くことばのバリエーション』p.17
- 4 Kluckhohn, C. and Kelly, W.H. The concept of culture. *The Science of Man in the World Crisis*, p.97
- 5 Downs, J. *Cultures in Crisis*, p.35
- 6 Adler, P. Beyond cultural identity: Reflections on cultural and multicultural man. In Gary Weaver(Ed), *Culture, communication and conflict*, p.250
- 7 石井敏「第4章 言語メッセージと非言語メッセージ」『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』p.87
- 8 井出祥子「第1部 異文化コミュニケーション学 共生社会の礎を求めて」『異文化コミュニケーション』p.4
- 9 ウォードハフ, R. 『社会言語学入門』p.288
- 10 鍋倉健悦『異文化コミュニケーション入門』p.42
- 11 滝川桂子「言語の背景—翻訳における違和感」『名古屋文理短期大学紀要 第20号』p.143

- 12 灘光洋子「第2章 異文化コミュニケーターとしての通訳者」『多文化社会と異文化コミュニケーション』p.39
- 13 山岸勝榮『日英言語文化論考』p.40
- 14 細川英雄『言語教育とアイデンティティ』p.4

引用・参考文献

- ・石井敏 (1996)「第4章 言語メッセージと非言語メッセージ」『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』有斐閣選書 pp.81-100
- ・井出祥子 (2005)「第1部 異文化コミュニケーション学 共生社会の礎を求めて」『異文化コミュニケーション』ひつじ書房 pp.2-23
- ・ウォードハフ, R. (著) 田部滋・本名信行 (監訳) (1994)『社会言語学入門』リーベル出版
- ・滝川桂子 (1995)「言語の背景—翻訳における違和感」『名古屋文理短期大学紀要 第20号』pp.143-151
- ・土居健郎 (1971)『「甘え」の構造』弘文堂
- ・東本裕子 (2015a)「使用言語による思考・表現方法の変容に関する一考察」『比較文化研究 No.118』pp.139-154
- ・東本裕子 (2015b)「二言語使用者の使用言語によるアイデンティティの変容と背景文化から受ける影響」文京学院大学大学院外国語研究科
- ・灘光洋子 (2002)「第2章 異文化コミュニケーターとしての通訳者」『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社 pp.27-44
- ・鍋倉健悦 (1997)『異文化コミュニケーション入門』丸善ライブラリー
- ・細川英雄 (2011)『言語教育とアイデンティティ』春風社
- ・牧野成一 (2003)「文化能力基準作成は可能か」『日本語教育』第118号 pp.1-16
- ・マッカーティ, S. (著) 武本明子 (訳) (1999)「2言語・2文化併用の意義—成人バイリンガルの自己観察」『バイリンガルの世界』山本雅代 (編) 大修館書店 pp.133-159
- ・南雅彦 (2009)『言語と文化 言語学から読み解くことばのバリエーション』くろしお出版
- ・山岸勝榮 (1995)『日英言語文化論考』こびあん書房
- ・Adler, P.(1998). Beyond cultural identity: Reflections on cultural and multicultural man. In Gary Weaver (Ed), *Culture, communication and*

- conflict, pp.250-265, Needham Heights, MA: Grinn Press
- ・ Bailey, K.(2006). Marketing the eikaiwa wonderland: Ideology, akogare and gender alterity in English conversation school advertising in Japan. *Society and Space*, 24(1), pp.105-130
 - ・ Burton, S.K.(2003). Japanese women residents in England: A methodological and cultural study. DPhil thesis dissertation no: DX225943. University of Sussex, United Kingdom.
 - ・ Burton, S.K.(2006). Issues in Cross-Cultural Interviewing: Japanese Women in England. In R. Perks & A. Thomson (Eds.), *The Oral History Reader*, Second edition, pp.166-176. London: Routledge
 - ・ Burton, S.K.(2011). "English makes me act in a different way": To what extent can a change of language affect speech and behavior? *The Language Teacher*: 35.3 May/June 2011. Tokyo: JALT Publications, pp.31-36
 - ・ Downs, J.(1971). *Cultures in Crisis*. Beverly Hills, Calif.: Glencoe Press
 - ・ Ervin-tripp, S.(1964). Language and TAT content in bilinguals. *Journal of abnormal and social psychology*, 68(5), pp.500-507
 - ・ Ervin-tripp, S.(1967). An Issei learns English. *Journal of social issues*, 23, pp.78-90
 - ・ Henser, S.(2000). Thinking in Japanese? What have we learned about language-specific thought since Ervin-Tripp's 1964 psychological tests of Japanese-English bilinguals? *Nissan Occasional Paper Series*, No.32, pp.1-31
 - ・ Kelsky, K.(2001). *Women on the verge: Japanese women, western dreams*. Durham, NC: Duke University Press
 - ・ Kluckhohn, C. and Kelly, W.H.(1945). The concept of culture. *The Science of Man in the World Crisis*, pp.78-106, Ralph Linton, Ed. New York: Columbia University Press
 - ・ Norton, P.B.(1997). Language, identity and the ownership of English. *TESOL Quarterly*, 31(3),9-31
 - ・ Pavlenko, A.(2006). *Bilingual minds: Emotional experience, expression, and representation*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
 - ・ Weaver, G.(1986). Understanding and coping with cross-cultural adjustment stress. In Michael Paige(Ed), *Cross-cultural Orientations: New conceptualizations and applications*, pp.111-145. Lanham, MD: University Press of America
- 添付資料 1**
- インタビュー調査対象者一覧
- ・ C1 : case1) D・Rさん (50代・女性)
インド出身でイギリスの大学院卒業。母語のベンガル語の他に英語、日本語を流暢に話す。日本居住歴は30年。日本の大学の英語教員。業務上の使用言語は英語と日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は主に日本語。子供との会話は日本語の他に英語、ベンガル語も使用する。
 - ・ C2 : case2) J・Gさん (40代・男性)
アメリカ出身でアメリカの大学院卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は20年。日本企業勤務を経て、現在日本の大学の英語教員。業務上の使用言語は英語と日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は主に日本語。子供との会話も主に日本語。
 - ・ C3 : case3) J・Sさん (40代・男性)
アメリカ出身でアメリカの大学卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は18年。日本企業勤務を経て、現在俳優業と日本の大学の英語教員を兼職。業務上の使用言語は日本語と英語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は日本語>英語の両言語。子供との会話は主に日本語。
 - ・ C4 : case4) R・Bさん (50代・男性)
アメリカ出身でアメリカの大学卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は18年。俳優業を経て、現在日本企業の広報部門勤務。英語学習に関する著書も出版。業務上の使用言語は日本語と英語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は主に日本語。子供との会話も日本語。
 - ・ C5 : case5) A・Mさん (30代・男性)
アメリカ出身でアメリカの大学卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は10年。日本の専門学校の英語教員。業務上の使用言語は英語と日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は英語>日本語の両言語。子供との会話は主に英語。
 - ・ C6 : case6) I・Mさん (40代・男性)
イスラエル出身でアメリカの大学卒業。母語のヘブライ語の他に英語、スペイン語、日本語、フランス語をいずれも流暢に話す。父親がイスラエル出身。

母親がメキシコ出身というルーツを持ち、アメリカとイスラエルで育った。子供の頃の家庭での使用言語は、家族が全員揃っている時は、英語かヘブライ語、母や姉と話す時はそれに加えてスペイン語であった。日本居住歴は10年。日本企業の翻訳担当部門勤務。業務上の使用言語は日本語と英語。現在一人暮らし。

・ C7 : case7) C・Hさん (30代・男性)

フランス出身でフランスの大学院を卒業。母語のフランス語の他に、日本語、英語をいずれも流暢に話す。日本居住歴は8年。日本企業の製品開発部門に勤務。業務上の使用言語は日本語と英語。配偶者は台湾人で、夫婦間の使用言語は日本語と英語が半々。

・ C8 : case8) N・Nさん (30代・女性)

コロンビア出身でカナダの大学院を卒業。母語のスペイン語の他に、英語、日本語をいずれも流暢に話す。小学生時代までをコロンビアで過ごし、その後家族でカナダに移住。子供の頃の家庭での使用言語は、両親とはスペイン語、兄弟とは英語であった。日本居住歴は14年。日本の企業勤務を経て、現在日本の大学の英語教員。業務上の使用言語は英語と日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は日本語。子供との会話は日本語とスペイン語を共に使用する。

・ C9 : case9) M・Oさん (40代・男性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語と中国語を流暢に話す。両親ともに日本出身というルーツを持ち、アメリカで育ちアメリカの教育を受けた。子供の頃の家庭での使用言語は英語と日本語の両方であった。日本居住歴は20年。日本企業の製品開発部門勤務。業務上の使用言語は日本語。配偶者は台湾人で、夫婦間の使用言語は中国語と日本語が半々。

・ C10 : case10) B・Sさん (60代・男性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は31年。日本政府関連機構の研究員。業務上の使用言語は主に英語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は主に英語。

・ C11 : case11) R・Wさん (30代・女性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。日本居住歴は8年。日本企業の広報部門勤務。業務上の使用言語は日本語と英語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は日本語>英語の両言語。子供との会話も両言語を使用

する。

・ C12 : case12) R・Jさん (40代・男性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。父がアメリカ人、母が日本人と言うルーツを持ち、アメリカで育ちアメリカの教育を受けた。子供の頃の家庭での使用言語は、両親とは日本語、兄弟同士は英語であった。日本居住歴は20年。英語教員を経て現在日本企業の翻訳担当部門勤務。業務上の使用言語は日本語と英語。婚約者は日本人で、主な会話は英語。

・ C13 : case13) N・Hさん (40代・男性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。父がアメリカ人、母が日本人と言うルーツを持ち、アメリカで育ちアメリカの教育を受けたが、小学校の1年生から3年生は日本で教育を受け、アメリカに帰国後も日本語補習校に週1度通った。日本居住歴は18年。英語教師を経て、現在日本企業の企画部門勤務。業務上の使用言語は日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は英語と日本語が半々。子供との会話も両言語を使用する。

・ C14 : case14) S・Iさん (40代・女性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。幼少の頃に父親の転勤で日本に4年間住み、日本にあるインターナショナル幼稚園へ通った。日本居住歴は24年。英語教師、ラジオ英語番組スタッフ、日本企業勤務を経て、現在異文化コミュニケーション講師として主に日本企業の海外赴任前研修等を担当。業務上の使用言語は英語と日本語。配偶者は日本人で、夫婦間の使用言語は英語と日本語が半々。子供との会話も両言語を使用。

・ C15 : case15) B・Bさん (30代・女性)

アメリカ出身でアメリカの大学を卒業。母語の英語の他に日本語を流暢に話す。父がアメリカ人、母が日本人と言うルーツを持ち、アメリカで育ちアメリカの教育を受けた。子供の頃の家庭での使用言語は英語と日本語。日本居住歴は11年。英語教師を経て、現在異文化コミュニケーション講師として主に日本企業の海外赴任前研修等を担当。業務上の使用言語は英語と日本語。現在一人暮らし。

・ C16 : case16) M・Lさん (20代・女性)

中国出身でオーストラリアの大学を卒業。大学で日本語を専攻した。母語の英語の他に広東語と北京語、日本語を流暢に話す。中国出身の両親を持ち、自身

の幼少期に家族でオーストラリアへ移住し、オーストラリアの教育を受けた。子供の頃の家庭での使用言語は、両親とは広東語、兄とは英語。日本居住歴は4年。英語教師を経て、現在日本企業の教育教材作成部に勤務。業務上の使用言語は主に英語。現在一人暮らし。

添付資料2

インタビュー調査項目

- Q1 : Do you think the language you speak affects the way you think or talk? For example, do you feel any differences when you speak Japanese compare to when you speak English? (使用する言語があなたの考え方や話し方に影響を与えていると思いますか? 日本語を話す時と英語を話す時で気持ちの変化がありますか?)
- Q2 : Have you ever been told by your friends or family that your impression, behavior or voice pitch changes depending on the language you speak? (話す言語によってあなたの印象や行動や声の高さが変わると他の人から言われたことがありますか?)
- Q3 : Do you know anyone whose impression, behavior or voice pitch changes depending on the language he or she speaks? (話す言語によって印象や行動や声の高さが変わる人を知っていますか?)
- Q4 : What are convenient or inconvenient factors about English language and Japanese language respectively? (英語と日本語のそれぞれ便利もしくは不便だと感じる点はどのようなことですか?)
- Q5 : What are merits or demerits about being able to speak two or more languages? (二言語以上話すことが出来ることによるメリットやデメリットはどのようなことですか?)

添付資料3

Q1に対する回答者のコメント。

なお各コメント後の(C1)等は、本論3.1の表1回答者一覧左端の各回答者識別番号と添付資料1の回答者識別番号を示す。

・「言語によって自分の発言の内容は変化しないが、声の出し方や高さが変わる。日本語で話す時は、日本文化の女性に対する可愛らしいイメージの影

響を受け、自分の声も可愛い感じになる。英語やベンガル語では自然な素の声で話す。英語やベンガル語の素の声の方が自分としては好ましいが、それぞれの言語の性格をそのまま受け止め尊重し、あまり比較しないようにしている。一つひとつの対訳を考えず、その言語を話す時にはその言語の頭で考えている。」(C1)

- ・「日本語は母語ではないため、慎重に言葉を選んで話す。また文化的に期待されていると感じる表現や発言内容が控え目なものであるため、自分も無意識にそうなり、その結果、日本語で話している自分は英語で話している自分に比べて控え目で大人しいと思う。」(C2)
- ・「日本語では『原因→結果』、英語では『結果→原因』と思考法や表現方法が大きく異なるため、それぞれの言語を話す際に気持ちや考え方が変化する。日本語では、文の最後まで聞き終わらないと肯定なのか否定なのか、発言の意図や大切な点がわからないことが多いため、文末まで待とうという辛抱心が自ずと育つ気がする。日本語で話していると、一部自分を演じているような部分があり、理想的な自己イメージを作ることが出来て楽しい。」(C3)
- ・「各言語ならではの言い回しがあり、話す言語によって発言内容にも大きな影響がある。以前は英語でまず考えてから日本語に訳していたが、最初から日本語のみで考える訓練を重ねた結果、状況を考慮した文化的な日本語表現がたくさん身に付いた。」(C4)
- ・「英語は直接的な表現を使って話す。日本語は長い言い回しが多く、直接的に話し辛い。直接的に響かないように、意図的に長目の言い回しが多いのだろうか? 日本語を習得したことによって、英語で話している時でも他人を気遣うようになり、以前に比べて周囲に迷惑をかけないように配慮をしているようだ、と友人から指摘された。」(C5)
- ・「その人の言語レベルにもよるが、言語とその背景にある文化は密接に繋がっているため、使う言語によって気持ちや思考に変化が起きる。自分の場合は言語能力は同じ程度であっても、日本語を話す時は物事に対してやや不安で自信が無くなる傾向があり、英語で話す時には友好的になる傾向、またスペイン語で話す時には元気で気持ちが温かくなる傾向、ヘブライ語では直接的で積極的な傾

向になる。また、日本語を習得したためか、もしくは日本企業で働いているためか、英語で話している時でも、敬語的に丁寧話すようになって来た。」(C6)

- ・「フランス語は母語なので最も自分が自然体。英語は感情を表す表現がもともと多く、話す相手も妻なので、自分の気持ちを表現し易い。日本語は仕事上で使用する言語なので感情は表し辛いですが、業務上は便利。英語では自分が達成したこと等そのまま話すが、日本語では自慢と解釈される恐れがあることを言葉にすることに違和感があり、差し控える。文化的な問題が、言葉の一部になっている気がする。より直接的な表現をする順で並べると英語>フランス語>日本語。」(C7)
- ・「スペイン語>英語>日本語の順で感情を表し易い。母語はスペイン語だが、スペイン語で教育を受けたのは中学までで、それ以降は英語の教育に切り替えたため、専門的な話題はスペイン語より英語の方が好ましい。成人後の大半にあたる14年を日本で過ごし、現在の生活ではほとんど日本語のみを使用しているため、日本語はいま自分にとって最も身近であり単語もすぐに出て来る。ただ日本語では、攻撃された相手から思われないうえに、言いたいことの半分くらいで止め、あとはヒントを与えて会話をしているため、自分の気持ちを言い切れたという感覚を持ってない。一方、英語やスペイン語は100%相手に伝え切れたという感覚がある。」(C8)
- ・「怒る時等、感情を表し易いのは英語だと思う。感情を表す語彙や表現が日本語に比べて豊富にある。英語では背景文化や習慣もわかるので話しているのも楽。日本語を話す際には、背景にある習慣等がわからないこともあるため、自分が正しい文化的解釈の中で言葉を使用出来ているか時々気になる。」(C9)
- ・「英語は直接的な表現が多く、より本当の自分の姿を表している。日本語で話す際には直接的な表現は避け、文化に沿うようにより良い態度、言葉等で自分を演じるように表現している感じがする。若い時は日本語でももう少し積極的な表現を用いていたが、年齢と共により穏やかになりつつある。英語で話す場合でも、職場における役割が年齢と共に変化し、自分の話し方が以前よりマイルド且つ中立的になったように感じる。」(C10)
- ・「英語では直接的な表現を用いて率直に話し、日

- 本語では謙遜気味に話している。例えば職場で新しい仕事を任された時、英語では少々自信が無かったとしても、“I can do this. Leave it to me.”(出来ます。任せて下さい。)と言うが、現在勤務している日本企業では、たとえ自信がある場合でも『自信はありませんが最善を尽くします。』と言うようにしている。英語と同じ内容を日本語で発言したら文化に即さないと思うから。このような感覚は、アメリカの大学で日本語を科目の一つとして教室で学んでいる時にはわからなかった。その経験から、言語は実際にその文化の中に身を置いて学ぶべきだと感じている。その方が、言語表現の自然な使い方やタイミングを習得し易いと思う。言語と文化は切り離せないもので、今でも時々言語の背景にある文化的なキーポイントを理解しそびれた時に、周囲から取り残された迷子のような気持ちになることがある。」(C11)
- ・「日本語で話す時は謙遜、謙譲の気持ちになり、相手と一定の距離を保とうと自然に思う。英語では相手との距離を縮められる。日本語で話す時には自分のことを自慢したりはしない。何となくその方が良いような空気を感じるし、言葉自体もそのように作られていない印象がある。自分の感情を表す時やジョークを言う時には、英語の方が表現し易い。特にジョークは言いたい内容が文化に繋がっていることが多いため、より深く背景文化を理解している英語の方がジョークを言い易く感じる。翻訳の業務において、英語と日本語の背景にある文化の違いに由来する難しさに度々直面する。そのことから言葉と文化の深い関係を実感している。」(C12)
 - ・「日本に居る時には日本語で、アメリカに居る時には英語で話すことを好ましく感じる。それぞれの文化に合った話し方が出来るため、日本語で話す時は、時々好ましい自己像を演じているような気持ちになることもある。」(C13)
 - ・「英語は低コンテキストなので伝わり易いように率直に話すよう心掛けている。日本語は高コンテキストなので控え目且つ慎重に話すようにしている。日本語を習得したことにより、英語で話す際にも発言内容が慎重になり、以前は感じなかった英語話者のアイコンタクトを強いと感じるようになった。また多くの日本語話者に見られる相槌と頷きの癖が自分にも付いてしまい、どちらの言語で話す時にも無意識に相槌を打ち、頷きながら会

話をするようになった。」(C14)

- ・「言葉だけではなく、文化と話す相手と言葉がそれぞれ話し手に影響を与えていると思う。英語は低コンテキストなので、誤解を生まないように伝えたいことを全て明確に言語化して話す。日本語では直接的な表現を避け、また常に相手との上下関係を考えて話す。職場で話す際に、日本語を使う場合にはフラットな立ち位置で話すと違和感を覚えるので、周りの人に倣い、上下関係を考慮しながら敬語を混ぜて話す。

母と日本語で話す際には敬語は使わずフラットに話す。日本で働き始めてから自分の英語が日本的になり、上司のイギリス人と英語で話していても、『今、言い過ぎたかな?』と心配になることもある。日本人の女性の日本語を話す際の声の高さが、日本社会の女性に対する可愛らしさの期待を体現したもののよう感じられ抵抗を覚える。それに反発する意味もあり、自分は日本語を話す際にあえて英語で話す時よりも低い声で話すようにしている。」(C15)

- ・「言語によって自分の気持ちが変わるというよりは、話す相手と状況で変わる気がする。自分は英語ではダイレクトにはっきりと話し、日本語ではインダイレクトに遠回しにほやかして話す。発言の内容はほぼ同じでも、表現の仕方が大きく異なる。オーストラリアの大学で日本語クラスを履修した際には文法中心で、そのような文化による話し方の違いについては学ばなかったが、日本で暮らし始めて周囲の人々の様子から学んだ。大学の日本文化のクラスで学んだ内容は、『天下り』についてであった。」(C16)

添付資料4

Q2へ「ある」と答えた回答者のコメント。

- ・「英語で話す時は、日本語で話す時に比べて大雑把で粗い印象になる、と妻から言われる。日本語では曖昧にほかして話すことが多いが、英語では直接的な表現を用いて話すので、言葉のストラテジーが異なるためにそうなっているであろう。」(C2)
- ・「日本語を話している時は、文化的にも日本社会の影響を受けるためか、時間も守るようになり、きちんとした印象になると言われる。好ましい自分を演じているような感じで、以前は日本語を話す自分と英語を話す自分でイメージが異なってい

たようだが、日本で18年生活した現在は両者が融合されて一つの個性にまとまって来たような印象だと言われる。」(C3)

- ・「日本語を話している時はシリアスで笑顔が少ないと妻に言われる。」(C5)
- ・「英語で話している時は自然で素直、日本語で話している時は礼儀正しい印象、ヘブライ語で話している時は深刻で真面目だと姉から言われる。また、スウェーデン人のクライアントから、英語が日本的だと言われた。アメリカの大学を卒業してすぐに日本で就職し日本人の中で長年勤務してきたため、日本企業的な英語表現や対応が身に付いたのかもしれない。卒業後アメリカでそのまま就職していたら違ったであろう。」(C6)
- ・「二週間に一度の割合でフランスにいる両親とスカイプで話すが、自分の様子がフランス語を話している時でも『ウンウン』と相槌を打ちながら聞いたりし、全体的に日本的な印象になったと言われる。」(C7)
- ・「声の高さと大きさが変わると言われる。スペイン語は最も声が高くボリュームも大きいですが、日本語では高さも声量も控え目になる。英語で話す時は最も声が低いと家族から言われる。」(C8)
- ・「英語では沢山の内容を速いスピードで話すが、日本語で話す時にはゆっくり目にテンポが変わる、と妻に指摘され、急かされる。」(C9)
- ・「英語で話している時と比べ、日本語ではかなり声が高くなると周囲から言われる。自分でも自分の声の高さの変化に気が付く。無意識に、日本社会の女性に対する文化的な期待値に合わせてやとしてしまうようで、自然にそうになってしまう。声を出す際に、日本語と英語では喉の異なる部分の筋肉を使っている気がする。また日本語の習得と共に、会話をする際にこまめに相槌を打つ癖が身に付き、英語で話している時でも頻繁に『ウンウン』と頷きながら相槌を打ってしまうため、アメリカの弟から、目障りなので止めて欲しいと注意を受けた。アメリカでは、相手が話している間は相手の目を見てじっと話を聞き、話の切れ目で“I think so, too.”等言葉を挟むのが一般的。」(C11)
- ・「英語を話している時はジェスチャーが多く、無意識に手を動かしながら話すようだが、日本語を話す時はジェスチャーが無いと友人に言われる。これは周囲の日本人に合わせて意識的にそうしている。また、日本語を話している時は、きちんと

相手の話を聞いていることを示すために、頷きながら聞いていると言われる。」(C13)

- ・「日本語を話す時にはジェスチャーが日本ほくなると、アメリカの両親や妹から言われる。日本的な相槌を打つところや、口を押さえて笑うところ等、自分から取るアイコンタクトもソフトになり、これは英語を話す時にもそのように変化してきたと感じる。」(C14)
- ・「日本語で話している時には、話しながらお辞儀をしたり、会話の中で謝ったりすることが多い印象だと父から言われた。また、アメリカに帰国しアメリカの友人と英語で話をする時でも、会話の中で早目に謝ったり等、日本人ほくなって来たと言われる。日本語と英語で声の高さも変わると友人から言われる。英語では自然なトーンで日本語より少し高目の声。日本語は意識的に低い声で話すようにしている。これは恐らく文化的な期待に比べて多くの日本人女性が非常に高い声で話すことに対する抵抗である。」(C15)
- ・「中国語で話す時には声が大きくなると言われる。言語の発音的な特性が要因の一つだと思う。また指摘されたことは無いが、自分で感じているのは、英語を話す時に比べて日本語では自分の声が高くなる。文化的に女性が高い声で可愛らしく話す期待を感じるため、そのようにしている。」(C16)

Q2に対して「ない」と答えた4名の回答者の内、1名のみコメントがあったものを示す。

- ・「基本的に一人の人は一言語で話すので、言語によって印象が異なると指摘されたことは無い。ただ、娘を叱る時は、同じ内容であっても日本語では強く響き過ぎてしまうため、英語とベンガル語を使うようにしている。」(C1)

添付資料5

Q3に対する回答者のコメント。

- ・「自分の子供は、日本語で話す時には『どうも』『すみません』『お帰り』等、決まり文句と定型挨拶を多用して没個性の印象。一方英語で話す時には、定型表現が殆ど無いため、心と頭を使って会話をしている印象で個性が表れる。」(C1)
- ・「教員仲間の日本人の英語の先生は、日本語で話している時には組織内の上下関係等、文化的な期待や縛りに配慮して発言し、やや窮屈そうに見えるが、英語で話している時には気持ちが楽なよう

に見え、印象も異なる。」(C2)

- ・「使用言語によって印象が異なる人は今まで何人かいたが、今すぐに具体例を思い出せない。」(C3)
- ・「同僚のアメリカ人は、英語ではラフでL.A.的な雰囲気を醸し出しているが、日本語で話す時には真面目で正統派な印象に変わる。」(C4)
- ・「日本人である妻は、日本語で話している時にはナーバスで、来客時にも『失礼が無いように』『これで大丈夫かしら』等、細部まで気遣い、日本的な気配りを欠かさないが、英語で話している時はとてもリラックスしている。使用する言語によってメンタリティーや物の捉え方が大きく異なる印象。その言語の背景文化と対話の相手からの影響の双方が要因だと思う。」(C5)
- ・「姉は、イタリア語で話している時には非常に友好的で愉しそう。一方ヘブライ語で話す時は真面目で頼りがいがある印象。イタリア語は、元々イタリアが好きで留学をして身に付けた言語なので、言語自体が良いイメージと結びついていることが話している時の印象に影響しているのだと思う。」(C6)
- ・「台湾出身の妻は、中国語や英語で話す時と比べて、日本語で話している時には声が高く、可愛らしい印象になる。社会的且つ文化的な期待イメージに合わせているように見える。また同僚のアメリカ人女性も日本語を話す際には周囲の日本人女性に合わせて声が高くなる。フランスでは女性も男性も皆、もっと本来あるがままの自然な印象である。」(C7)
- ・「コロンビア人の友人は、スペイン語では声が高く、英語では声が低くなる。スペイン語圏文化の、女性に対する感情的で愛情深い期待イメージに合わせているように見える。日本人の夫は、スペイン語を使う時には一生懸命話し過ぎて子供っぽい印象になる。」(C8)
- ・「台湾出身の妻は、中国語で話す時には声が大きくなり、ピッチも高くなる。日本語では静かに話す。英語を話す際には早口になり、積極的な印象になる。」(C9)
- ・「職場の日本人女性が、日本語で話す時には英語の時と比べて非常に声が高くなり、話すスピードも速くなる。電話で話す際には普段のトーンより更に高いトーンの日本語で話している。」(C10)
- ・「友人のアメリカ人の女性は、英語の時と比べて

日本語を話す際にはかなり控え目になる。一方で、全く印象が変わらないアメリカ人女性の友人も一人いるが、彼女は日本在住ながらも普通の付き合いが外国人に限られており、日本社会との接点が少ないため、文化的な影響を受けていないように見える。また、全般的に日本人女性の声が高いことに、来日後非常に驚いた。お店の「いらっしゃいませー」という甲高い声は、日本女性に対する社会的なイメージを表しているように感じる。アメリカの大学で日本語を履修している時には、声の高さについて全く考えたことも無かったが、やはり言語と文化は密接に関係しているので、文化の中での言語の使い方を学ぶことが重要だと思う。」(C11)

- ・「友人の日本人女性は、日本語を話す時は声が高く、英語を話す時は声が低い。また英語の時にはジェスチャーも豊富になる。」(C12)
- ・「自分の周りの殆どの人が、言葉を変えると印象が大きく変わる。その人の母語にかかわらず、日本語を話す時と謙虚で静かな印象になる人が多く、一方英語を話す時と多くの人が社会的になり距離が縮まる感じがする。日本人の妻も同じ変化が見られる。妻の場合は、大阪出身なので、日本語の中でも大阪弁を話す時と標準語を話す時でメンタリティーが変化するように、大阪弁では声が大きく元気で上から目線で話すのが、標準語では控え目に話す。相手によって状況にフィットするように話し方や自分の印象をコントロールしているように見える。」(C13)
- ・「知り合いの日本人の女性で日本語の時に声が高くなる人が多い。電話も人工的な高い声で対応している。日本文化の女性への期待に応じての声の変化だと思う。アメリカでは女性も低い声の方が信頼感があるイメージがあり、わざと低い声で落ち着いたように話す傾向もある。」(C14)
- ・「同僚のアメリカ人女性は、日本語で話す時には女性語や女性的な語尾を使うため、英語で話す時と比べてフェミニンな印象になる。またイギリス人の男性上司は、日本語では演技をしているように声や身振りが大きくなる。外国語だからか、いわゆる、典型的な外国人っぽい様子を意図的に行っているように見える。」(C15)
- ・「同僚の日本人女性は日本語で話す時には低目の声で話し、英語の時には声が可愛らしい印象になる。よくあるパターンと逆。英語に対する自信の

無さが要因かも。」(C16)

添付資料6

Q4に対する回答者のコメント。

- ・「敬語は難しいが、相手の面子を保つのに便利だし、相手と一定の距離感を保つことが出来て便利。英語で話す時のように、相手と近くなり過ぎず、快適に感じる。」(C3)(C6)
- ・「日本語の女性語はソフトな女性らしい印象で好ましく、母や妻（共に日本人）が女性語を使って話しているのを聞くのは好きだが、もし自分が女性で、女性語を学ばなければいけないとしたら、標準日本語に加えてもう一つの話し方の習得を不便に感じるだろう。」(C13)
- ・「親しくなりたいと感じた日本人の年齢や職位が上の場合には、敬語が壁になり、友人関係には発展出来なさそうだと感じてしまう。日本人同士も、世代の異なる友人を作り辛いのではないだろうか。」(C8)
- ・「日本企業に勤務しているが、日本人の上司と昇給の交渉等、お金の話をし辛い。日本語は言葉自体が和を保つ大切さをもとに作られている印象があり、自分が得を当ててに仕事をしているのではないかと思われたくないで金銭的な話はしないようにしている。」(C12)
- ・「日本語は要求や自分の評価に繋がるようなことを話し辛い。」(C6)
- ・「病院で医師との会話は日本語ではし辛い。語彙力の問題では無く、日本とアメリカで医師と患者の関係が大きく異なるため、日本では医師と患者に上下関係があるように感じられ、質問や自分の考えを口に出しにくいのが、英語では対等に話す。言葉というより、日本の社会や文化が要因ではないかを感じる。」(C15)
- ・「仕事の話をする時に、日本語では直接的な表現を避けて婉曲的な表現を使うのでなかなか業務が進まない場合があるが、英語に切り替えると自分も同僚も率直に発言するので業務が早く進み、便利。」(C7)
- ・「教育を受けた言語が英語なので、専門分野に関しては英語の方が圧倒的に語彙力が高く、便利に感じる。仕事上の用語や表現は日本の会社で身に付けたので、今の仕事を全て英語で行うようにと言われたら非常に難しい。日本語でないと完璧には出来ない。」(C14)
- ・「英語ではスラングをはじめ、悪い言葉が一般的

になり過ぎている。女性の話し方も時に乱暴過ぎると感じる。日本語の女性語と随分印象が異なる。」(C5)

- ・「日本人は自身の便秘のこと等、アメリカではまず人前で話さない身体的なことを職場でもオープンに話すので驚く。アメリカでは身体について話すことは非常にプライベートなことで、家族の間でもあからさまに話さない。一方で、夫は日本人で針灸師として不妊治療も診るが、アメリカでは不妊治療に関してオープンに話題にすることに対し、日本では治療について伏せている人が多いことに、文化の違いを感じる。家制度や跡継ぎの考え方が関係しているのだろうか。」(C11)
- ・「どちらの言語のどの点が便利というよりも、その時の状況に応じてよりピッタリの表現や語彙を知っている言語が使い易いと感じる。特に冗談は背景文化と結びついており、笑いのツボも文化や言語によって異なるので、場面に応じて使い分けたいと思う。」(C13)

添付資料7

Q5に対する回答者のコメント

- ・「二つ以上の言葉を習得するということは、同時に二つ以上の文化要素を身に付けるということだと感じている。」(C2)
- ・「新しい言語を習得するということは、自分の人生に新しい窓がもう一つ開く感じ。言語が増える度に新しい色が増え、自分自身が彩鮮やかなパレットになるような感覚。一方で、自分のアイデンティティはどこに所属するのかわからなくなることもある。」(C6)
- ・「その言語が実際に使用されていない土地でいくら上手に言葉だけを学んでも、実際にその文化の中で使用しコミュニケーションの経験を積まない限りは、その言語を通した本当の物の見方は身に付かない。言語能力の前に経験が大切。」(C12)
- ・「二つの言語を習得するということは、一つの箱から外に出て、色々な角度から物事を見たり、感じたりして感覚に幅がでること。」(C13)